

# 現代の産婆の力

矢島助産院物語

「産科医不足」論を見直す―

写真・文

山本宗補

フォトジャーナリスト

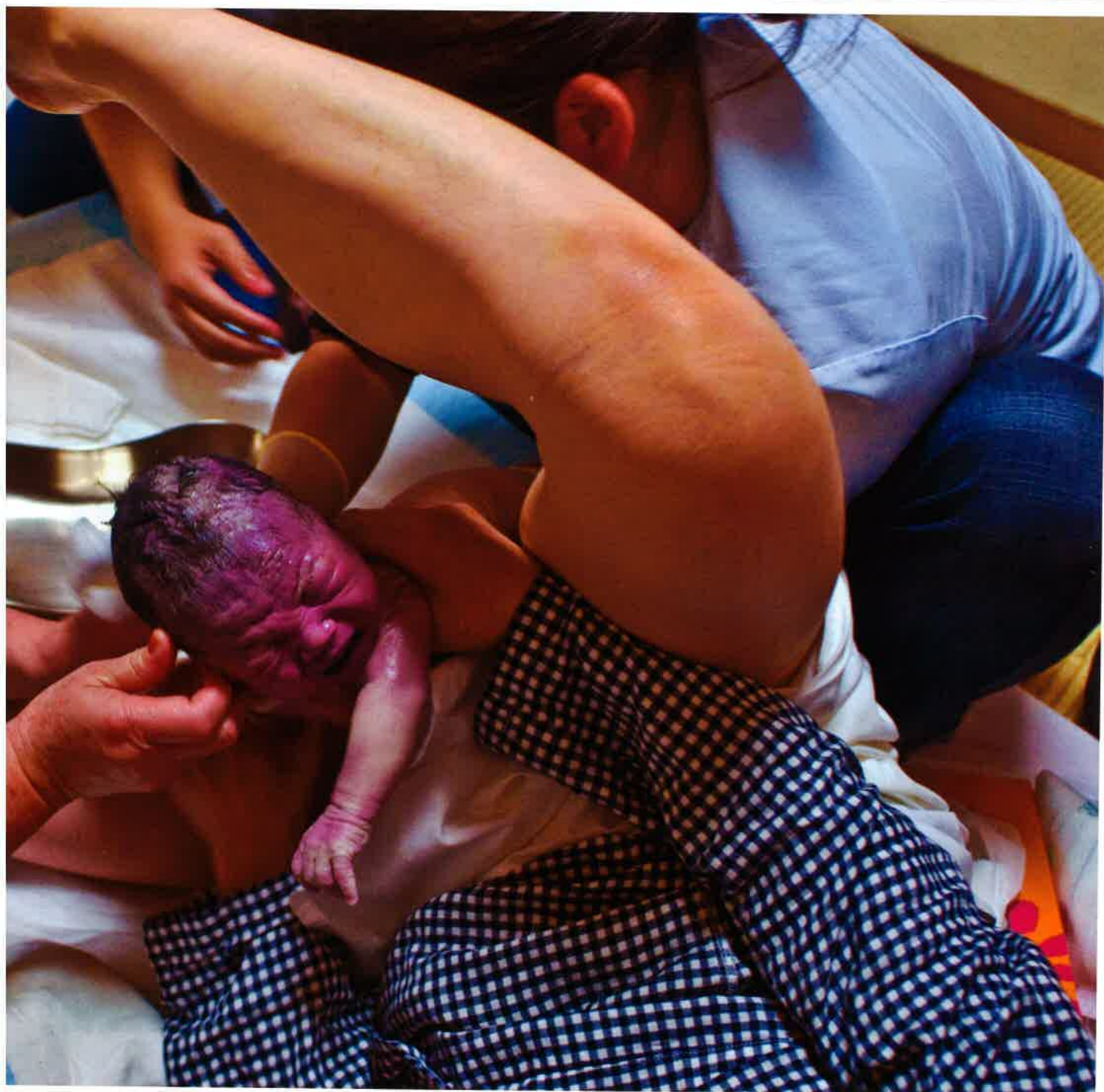


助産師の清水幹子さんがお腹にエコーをあて、胎児の様子を臨月の持田裕子さん（29歳）に分かり易く説明した。（2008年3月）





職場から駆けつけた夫の良将さんと2歳半の長女日菜ちゃんも見守る持田さんのお産の現場。陣痛に苦しむ持田さんを助産師3人が付き添い、腰や肩をさすり、ことばをかけて痛みを和らげた。(2008年4月)



自宅から助産院にかけつけて90分後、3030グラムの女の子の赤ちゃんが無事に産まれた。矢島床子さん(左端)と、助産師スタッフ、研修生の3人が介助する中、持田さんの両手が自然に伸びて赤ちゃんを抱えた。(2008年4月)





栄養豊かな朝食作りと配膳は、矢島さんの次男、聡（あきら）さんの仕事。前夜産まれた次女を隣に寝かせ、持田さんが待ち望んだ助産院の上げ膳据え膳生活が始まった。持田さんは長女も矢島助産院で出産した。（2008年4月）

出産から4泊5日後の朝、持田さん退院前の記念写真。後列が左から矢島床子さんと助産師スタッフ。長女の日菜ちゃんを抱える持田さんの面脇が栃木県の実家からかけつけたご両親。



東京・国分寺に開業して22年目を迎えた矢島助産院では、これまでに3580名の赤ちゃんが誕生した。助産院といっても、車3台分の駐車場スペースを除けば普通の二階建住宅にしか見えない。しかし、二部屋ある4畳半の和室では、年間230名（2008年）の赤ちゃんが自然分娩で生まれ、羊水で濡れたまま母親の胸元にギュッと抱きしめられる。3キロあまりの小さな命が、股間からスルリと出てくる助産院は、昼となく夜となく生きる希望に包まれ、大勢の助産師と研修生、産婦らの笑い声が心地よい環境をつくり出している。

院長の矢島床子（63歳）助産師に密着して2件のお産を撮影できたが、母と子

のゆるぎない絆と、現代の産婆である助産師の秘められた魅力を強烈に実感した。

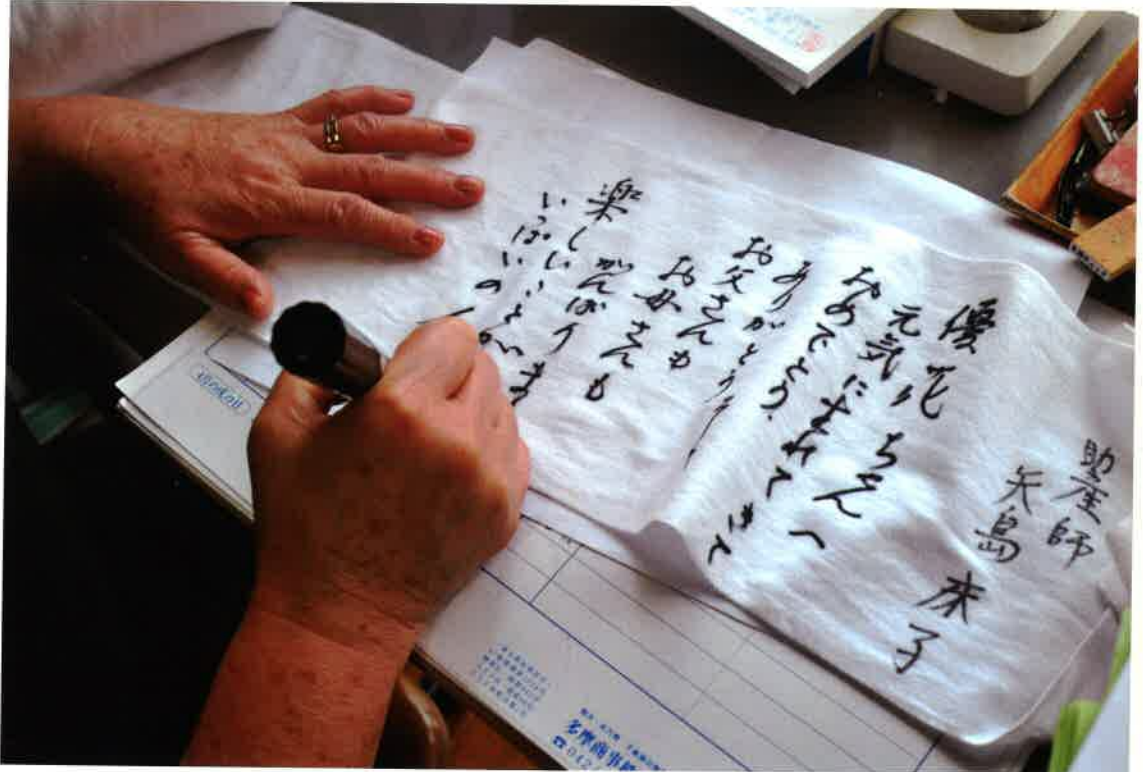
少子高齢化の日本だが、出生数は年間107万人（2008年）をこえる。医師数は過去10年間で増加したが、産婦人科医・産科医の数が1割減り、お産を扱う病院がこの1年間で8%減った。その結果、一部の病院に分娩が集中し産科医の過労問題も深刻だ。産科医療が崩壊の危機に直面しても政府・厚生省の対策は的外れに見える。産科医の待遇改善や高齢によるハイリスク出産対策も緊急課題だが、お産の7割〜8割は医療行為が必要ない正常出産であっても、産科医が関わる現状は手つかずだ。□



矢島助産院恒例の新春会の記念写真。助産院で産まれた子どもたちを連れて集まった親たち。同郷会さながらのにぎやかなイベントだ。一昨年、矢島助産院で出産した山梨県の助産師と産科医の夫も子どもを伴いかけた。(2009年2月、国分寺)



■ 医師と助産師の役割分担で機能する院内助産所やバースセンターの数少ない成功例が注目されているが、ならばそのシステムを全国に増やすのは国の仕事。産科と婦人科を分け、助産師たちが、産科医と対等の立場と自覚で女性を守る力を発揮できる体制作りこそが



矢島床子さんは腹帯に手書きでメッセージを書き、一人一人の妊婦に安産の願いをこめて渡す。包容力と明るさで日々のプレッシャーをはねのける矢島さんに惹かれ、たくさんの助産師と研修生が矢島助産院に全国から集まる。(2008年4月)

将来的な産科医不足対策となるのではないか。

「出産は病気ではない」。それが矢島さんの持論。少子化の時代に、「産む喜びをまた味わいたい」と3人目、4人目の子どもを産むリピーターが矢島助産院に多い事実がそれを物語っている。